

---

# 裏組織の少年事情

春華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

裏組織の少年事情

### 【Zコード】

Z5422W

### 【作者名】

春華

### 【あらすじ】

戸籍を持っていない少年たちが所属する組織。その組織に両親を逮捕された、ある少年が入会することになる。両親が逮捕された理由は?

これは、この少年の組織での生活記録である。

## プロローグ（前書き）

処女作です。基本文才がないと思します。更新は、不定期です。

もし、よかつたら読んでくださいませ。よろしくおねがいします。  
ああーどうしよ・・・（汗）きんかよー！！ 暴言など以外の口メ  
お願いします！

## プロローグ

決して表舞台では活動しない、スパイのよつな組織が日本の警察に属している。

身体能力は、プロのスポーツ選手並みに高く、どんな状況でも、冷静な判断が下せる、凄腕の者達。しかし、その組織の者達は戸籍も消去されている、表舞台では動けない者達なのだ。これは、そんな彼らの、お話である。

- \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* -

今までは、そこそこ幸せだったと思つ。

いつものような日常ばかりだったけれど、それでも、それが一番の幸せだったのだろう。

誰かが言った、“人間、人生のうちで幸せと不幸は同じ量だ”と。俺は、思えば幸せなことばかりだったと想つ。だから、俺は幸せは一気に押し寄せてきて、不幸は少しづつ来るタイプなのだとthought。だが、違つたようだ。

「ただいま。」

いつもと同じ。ここまでそうだった。でも、家には警察が来ていて、不思議に思つたのは、そこに俺と同じくらいの高校生がいたことだが、そんなことよりも、家に警察がいたことのほうが、俺にはびっくりだつた。

「どうしたの?」

声がかされた。きっと今、俺は素つ頓狂な顔をしているのだろうなと思つ。

「…………ごめんなさい。」

それだけ言って、両親は去つてしまつ。・・・警察と共に。ああ、そうか。俺は不幸が少しずつタイプじゃない。

今までの幸せをかき消すよつこ、不幸が一気にじつと  
押し寄せるタイプだ。

場違いにもそう思った。

## プロローグ（後書き）

どうでしょ？ 読んでくれている人いますか？

誤字脱字など、指摘お願いします！

次はもうと長いはずです！（多分・・・）

## case 1 (前書き)

はい、一括請求です。

今回は遅くなるのかな?

・・・なるとこだな。では、直しへお願ひします。

俺は、ただ呆然と連行される両親を見ていた。

「……何をしたんだろうね。何かしたのかな。何もしていないのかな。」

「え……」

いきなり声がかかる。誰かと思い、反射的に隣を見ると、さつき見た女の子が立っていた。

呆然としていたから気づかなかつたのだろうか？全く気配を感じなかつた。

「……どうだらうね。」

どうなんだらう。まだ、混乱していく分からなくて……。

「ねえ、あなたはこれからどうに行くの？」

「え！ ああ、どうじょうか。」

これから、そんなことなんか、考えられる余裕なんて無くて、ほんとにどうじょう。

母親も父親も、どちらの祖父祖母もいなくて、頼れる身内なんていなかつた。

「このまま、どつかの児童養護施設にでもいくつもり？そしたら、あなたは、犯罪者の子供として、いじめられるのがオチだわ。」

「……そうだね。」

どうじょうか。本当にどうじょう……。別に、いじめられてもいいと思つてしまつ。でもそれは、俺がこれまで幸せだったから、まわりにいじめというものが無かつたからこそ、思つことなのだろうか？

そうして、考えていたら女の子が話しかけてきた。

「……ねえ、私たちのところに来ない？」

「……え？」

私たちのところ？ それは何だらう？

その考えが見えていたように、女の子が話し始めた。

「私たちは、警察の裏組織。戸籍がない、表社会には決して存在しない人たちの属すところよ。あなたが来ることになるなら、あなたの戸籍が消去されるけど・・・どうする？」

「・・・裏組織? つていうのは何なの?」

当然の質問たゞ一、女の子もその質問が来ると思っていたのか  
やな顔をせずに話してくれた。

・・・それは、その組織に属していない者は知ることか  
の。 ただ、そうね、スパイ・・・みたいなものかしら? 」

急に笑い出した俺を、女の子は不思議そぞろに見ていた。  
「何たこい」とでも言わんばかりに。

「ああ、じめん・・・。そんな組織が日本に・・・そんな夢みたい  
な組織があるんだなあつて、思つたらちよつと面白くなつたんだよ。

まるで、悪い夢でも見ていいようだ。うであつてほしいと、思つた。

「ああ・・・。そうね。長く間いるから慣れてしまつたけれど・・・。  
そういうのね。・・・。ねえ、まさか、信じてないの?裏組織の  
こと・・・。」

心外だ、とでも言うような顔で俺を見ている。

「ああ、普通は信じないだろうな。でも・・・今はどうでもいいかな。例えば、これが詐欺で、このままあんたについて行つて、入会金はらいえ、とか言われても、今ならいいかな。まだ許せるんだ。」

女の子が困ったように俺を見る。どうしたら説得できるか、そういう

う顔だ。

「安心じろよ。信じてるさ。あんたたちのことも、裏組織に関する  
も。・・・・・そうだな。入りたいよ、その裏組織に。入れてくれる  
？」

女の子は、俺を哀れむように見て、

「ええ。大丈夫。」

そう言つた。

「」の日が俺の、新庄 正樹の命日となつた。

## case1 (後書き)

えりでしょ、やっぱり、短いですね・・・。

すいません！ほんとすいません。

長い話が書ける人に憧れます・・・。

## case2 (前書き)

うーん・・・。長い話が書けません！多分、case1が最長かと・・・。  
・・・精進します。がんばるぞーーー！  
ではでは、宜しくお願いしますー。ぜひ読んでくださいー！

「でも、よかつた。」

女の子が言う。何がだらうと思つた。

不思議そうに顔を傾けると、女の子がニコッと笑つていう。

「あなたがこの誘いを断つたら、私はあなたを、警察署に連行しなければならなかつたし。」

そんなこと笑顔でいうことだらうか・・・。

ちなみに今、俺たちはその組織の、いわゆる秘密基地に向かって、歩いている。

「なあ、それって、無実だろ? そんなんで、つかまるといだつたのか、俺・・・。」

「うん。そういうもの。身内がいる者には、さつきのよくな勧誘はしないんだけど、逮捕されたことによつて、身内が全くいなくなってしまう人には、正樹君のように、勧誘はするんだけど・・・、この組織のことは、この国のトップシークレットで、一般人には知られる訳にはいかないの。だから、勧誘に失敗したら、無実でも、適当な罪で逮捕。一生監視がつくか、ずっと牢屋で過ごすか、最悪死刑、なんていう判決が待つてゐる。実際、そういう人が何人もいるしね・・・。」

そんな、説明を女の子がした。断らなくて良かつたと、心から思う。そして、その説明をよく考えてみると、すると、不思議・・・といふか、違和感に気づく。

「・・・ねえ、あのさ。俺、君に名前教えたつけ? つていうか、何で身内がいなくなることまでしつてる?」

すると、女の子は一囁つと笑つて、

「そりや、事前に与えられた情報で知つてゐるんだよ。新庄 正樹くん。」

警察の情報す」つー・・・と本氣で思つた。

そんなことを話しながら歩いてくると、今、自分がビルの階段を上っていることに気づく。

「なあ、どうに行くの？」

その質問の意味に気づいたのか、女の子が、「ああ、裏組織の秘密基地はここから、少し離れたところにあるのだから、へりで向かうのよ。」

「ふうん。」

しばらくすると、ボオという、へりの音が聞こえた。

へりに乗り込むと、女の子が改まった顔で「さて」といった。

「じゃあ、これから裏組織のことについて詳しく話すね。もう一度確認するけど、ほんとに入るのね。このことを話した後で、やっぱやめます。とか言わないでね。」

「ああ。」

「どうせ、行くところ無いし……。は言わないでおく。」

「それに、やめる、なんて言つたら、さつきの判決の三択が待ってるんだろう？」

「はは、よく分かったね。うん。……じゃ、説明するね。まず、訂正。さつきスパイみたいなものって言つたけど、実際は暗殺者の方に近いかな？私たちは、極悪人や國のお偉いさんに関わった、表に出せない事件の犯人を捕まえるのが仕事。つていっても、私たちは事件を推理したりはしないわ。することは、警察の方の人が捕まえろって言つた人たちを、誰にばれることなく捕まえること。だから、・・・例えば、その事件の犯人じゃない人を捕まえたり、無理やり大事にした事件の犯人をつかまえたりすることも、あるのよ。」

「な！」

思わず、短い叫び声をあげた。何だそれは。あんまりにも理不尽じやないか。だが・・・、

「でも、逆らえないよな。それであなたたちは、食つていけるんだから・・・。」

すると、女の子は自嘲じみた笑みを浮かべる。女の子は、俺の言つたことには答へず、説明を続けた。

「・・・だから、私たちに求められるのは、気配を消せること、決して反抗しないこと、冷静な判断を下せること。じゃなきゃ、私は生きれない。・・・覚えておいてね。」

「ああ。」

戸籍が無い。とこいつ、死んだことになるのだ。もう表では生きられない。だから、はむかうことなんて、できないんだ。俺も、馬鹿ではない。生きることに必死だから、絶対はむかわないと、決めた。

「ああ、もうすぐ着くよ。秘密基地に。じゃあ、改めて、私は辰野 美恵。これから、よろしくね。」

「・・・ああ、よろしく。」

これで、もう、俺は表では生きられない。そう思った。

## case2 (後書き)

これ、どうなんでしょうか? case1より長いですか?  
でも、今回は区切りがありません。読みづらいですね。.  
いやーもう、文才ない時点で読みづらこんですけどね!  
次も、宜しくお願いします!

## case3 (前書き)

ああー、文才がちょーほしーです・・・。

何なんでしょう?何でしようね・・・。

はあー・・・まあ、ぐだぐだですかゞ、読みでぐだせー!

「「」が、裏組織の秘密基地だよ。」

そういうて、前で両手を広げて説明する。

裏組織の秘密基地といわれる場所は・・・、一言で言つと、でかかつた。というより、どこの豪邸だ！と叫びたくなるほど、豪華だ。裏組織なのにこんなに・・・

「田立つていいのか？・・・じゃない？」

自分の思つていたことが、言葉にだされ、ドキッとした。そんな俺を、辰野はくすくす笑つて見ている。

「例えばさ、人間つて、怪しければ怪しいほど、観察して見たい、中に入つて見たいって思うものじゃない？・・・まあ、逆の人もいるだろうけど・・・。でもさ、なんか煌びやかで、豪華だつたら、少しさはいりにくい感じがしない？」

うーん・・・まあ、そうかも・・・とよく考えれば思つ。

「まあ、でも安心してよ。中はこんな豪華な外見とは裏腹に、トレーニングルームとか、あるから。」

「はあ・・・。」

安心できる「」となのか？つと思つたが・・・、まあ気にしない。

「さて、」の秘密基地の案内を・・・、いたつ！」

突然、田の前に二十代前半の女が現れた。その女は、持つていたフライルで、辰野の頭を軽く叩き、

「お前なあ、いつになつたら覚えるんだー。」これは秘密基地じゃない！警察特殊機密部隊の総集所だ！」

と、怒鳴り声を上げた。

「うう・・・、相変わらず、向井はうるさいなあ。ああ、正樹君。この人は向井 龍葉さん。裏組織・・・じゃなくて、警察特殊機密部隊の指導員だよ。」

「ああ、こいつが・・・。よかつた。勧誘は成功したんだな。」

そう言つて、向井さんは優しい顔で俺を見た。

「ああ・・・えつと、新庄 正樹です。これから、宜しくお願ひします。」

そうじつて、俺はペコッと頭を下げた。すると、上からくしゃくしやつと頭をなでる手を感じた。

「おひー！宜しくなーこれから、ビシバシじじくから覚悟しろよー。」

頭を上げると、向井さんが、一カツと笑っていた。多分、厳しい人なんだろうけど、優しい人なんだろうと思った。

「じゃあ、案内するよ。辰野はまだ、仕事があるだろ？案内は私に任せて、わざと済ませる！」

そう、向井さんが言つて、辰野はつまらなそうに、

「ええー！・・・任務完了の書類書くのつてつまんないんだよ・・・。まあ、いいや。じやあね、正樹君。また後でー！」

そう言つて、辰野は走つて、その豪邸に・・・もとい総集所に向かつた。その時、俺とすれ違う時に、ボソッといつた。向井はいい人だよ。だから大丈夫。安心しなさいー。」

と言つた。それに俺も、ほそつと、

「うそ。そうだと思う。」

と言つて。すると、辰野はニコッと笑つて、

「じゃあねー！」

と言つて、見えなくなつた。

「よし、じゃあ案内する。つこつこ来いー！」

- \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* -

\* -

総集所の中は、なんというか、トレーニングルームがついている質素だけど豪華なホテルみたいな感じだつた。全三階立てで、一階

はトレーニングルーム、売店、風呂、休憩所、ランドリー、食堂があり、二階から三階は各個人の部屋のようだ。一階はどの階に比べてもすごく大きかった。

そこそこ案内が終わつた後、向井さんが重たく口を開いた。

「なあ、何でこんなに総集所が充実してるか分かるか？」

俺も、不思議に思つていた。だが、案内してもらつてゐる間、辰野に言つたことを、一個一個思い出していた。

・戸籍がない者達が集まるところ。

・知られたら、無実でも、最悪死刑。

これらのことを考えてしまえば、答えは明確だ。

「もう、表では生きていけないから・・・外に出れないからですか？」

そう言つと、向井さんは曇つた表情をした。けれど、そのことにして、俺は大して不便に思つていらない。だから、

「大丈夫です。いろいろ話を聞いていましたから。・・・何となく、そんな感じだらうと思つていました。あんまり、それを不便とは思ひません。それは、俺が今まで幸せだったから、覚悟のそつて言う、俺の表現で言つたら、皆さんとは比べ物にならない位浅いんだろうけど、でも、そんなものでも、きちんと覚悟しましたから。・・・だから、大丈夫。向井さんが思つてているほど、俺は不幸ではないです。」

すると、向井さんは曇つてゐるながらも、少し明るい顔をした。

「・・・おう！それでこそ、男だ。」

また、向井さんは頭をくしゃくしゃとなでた。俺は、きつと嬉しい顔をしていたはずだ。だつて、すごく嬉しかつたから。

「よし、じゃあさつそく、明日からトレーニングだ。お前はまだ新人だから、いきなり仕事は荷が重いし、失敗しかねん。とりあえず、気配をけせるようになることだ！お前は、冷静な判断は少し教えれば、すぐ出来るようになるだらう。」

「ありがとうございます！」

「じゃあ、やつをへ明日からこのトレーニングメニューをこなして  
もういいや。」

俺は、その練習メニューを見たとき、絶句する。

風呂、食事、睡眠は一日で七時間。つまり、それ以外の十七時間

は、トレーニング。休憩なし。

「頑張れ！応援してるぞ！」指導員は誰がなるかは分からんけどなー。」

「…………はい。」

——俺はこのとき初めて、この組織に入ったことを後悔した。

### case3 (後書き)

はあー。タイピングも早くなりたいです。

・・・頑張ります。

次回も宜しくですー！

## case 4 (前書き)

面白い話を書きたいなーと思つ、今日この頃。

今回は新キャラが二人出でます。そろそろ、混乱してきました。  
あとがきでもとめます。

では、宜しくお願ひします。

「はあー・・・。あれ、」  
太陽の光が顔に強く当たつて、目が覚める。しかし、いつもと違  
い部屋が質素で何も無く、倍くらいの大きさに感じた。そして、すぐ  
に思い出す。

「・・・そつか。」

そう言つて、少し、暗い気持ちになる。でも、別に死ぬわけではな  
いのだ。また、会える・・・。

「そういうえば、今日からトレーニングが始まるはず・・・。」  
そして、悪夢のトレーニングメニューを思い出し、さつきとは違つ  
暗い気持ちになる・・・。

「・・・・・とつあえず、昨日案内してもらつた、トレーニングル  
ーム行くか・・・・。」  
と、少々ずーんとした気持ちで、一階に向かつ。時間を見ると、ま  
だ六時少し前だった。

「まだ、早いか・・・・?」

とも思つたが、早く行くことに越したことは無いと思い、行くこと  
にした。

部屋を出ると、隣の部屋の人も出てきたようだ。やはり、俺と同  
じくらいで、高校生くらい。色素の薄い、男にしては少々長いくら  
いの髪に、長身瘦躯。優しそうな顔をしていた。

「あれ、君、新入り?」

その人が、話かけてきた。

「あ、はい! 昨日入りました、新庄 正樹です。」

「ふうん。年は?」

「あ、十七です。」

「あ、じゃあ、俺と変わんないよ。俺のほうがいつも上なだけだ。  
だから、敬語じゃなくて、タメ語でいいよ。俺は道信 文也。よろ

しぐ。」

道信 文也と名乗った人は、優しそうな、大人な感じの人だ。

「・・・よろしく。道信。」

ここは、優しい人が多いなと思う。けれどやっぱり、何か暗い過去があるんじゃないのか、と思う。優しいのは、その過去を悟られないようになんじやないかと、思う。

「なな、ところでさ、正樹って辰野さんと一緒に来たんだろ?」

「・・・ああ。そうだが・・・。」

「俺はあんまり興味ないんだが・・・、あの子、この組織で結構人気なんだよ。お前、恨まれるかもな。」

そう言つて、道信は楽しそうに、いたずらっぽく笑つた。

「あんまり、不吉なこと言うなよ・・・、道信。」

だが、そうなのか?と思った。あの時、俺はなかなかショックであり、顔なんて見ていなかつた。

そういうときに限つて、

「あれ、正樹君と道信? おはよう。もう仲良くなつたの?」  
噂をすれば、本人登場。

「おはよう、辰野。」

「おはよう。辰野さん。」

俺と、道信は挨拶を返した。そう言いながら、辰野を見てみる。

確かに、もてそうな顔だ。そこそこ長い髪を後ろでひとつでしばつていて、大きな目をしている。目鼻立ちも整つていて、こんな職業のためか、瘦せていた。

「聞いたよ、正樹君。今日からトレーニングなんだつて? 大変だね。」

「ああ。」

「指導員は向井じゃないみたいだよ。さつき向井がそう言つてた。それでね、向井からの伝言。朝飯食つてから、トレーニングルームに来い、だつて。」

どうやら、指導員は向井さんでは、ないみたいだ。少し、残念だ。

「ありがと。」

「じゃ、一緒に、食堂行こ。」

そう言って、辰野は歩き始めた。

「なんだ。結構仲がいいんだな。」

「そうか？・・・まあ、別に俺は人見知りするタイプじゃないし。」

「どうだ？辰野さんかわいいだろ？」

そう、にやにや笑いながら言つ。

「ああ、かわいいかもな。」

そう言つと、なぜか道信は残念そうな顔をした。

「あ、何かつまらない反応だな。」

「うーん。・・何か俺、色恋沙汰に興味が無いみたいなんだよな。」

「ふうん・・。」

それから、食堂に着く。食堂も質素ながらも豪華で、どのメニュー

ーもおいしそうだった。実際、俺が食べた料理は文句なし。

「さて、トレーニングルームに行くか・・・。」

そう言つて、俺はトレーニングルームに向かつた。

- \* - \* -

- \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* -

「おはようござります。これから、君の指導員になります、狩下  
満と言こます。よろしく。」

どうやら、俺の指導員は狩下さんになるようだ。あまり、強そうとは言えない、礼儀正しい紳士だ。短く、少し青みがかつた色の髪で、いつも「ゴー」をしている顔。あまり身長は高くなく、ひょろつとしている。

「宜しくお願いします。新庄 正樹です。」

「はい。では、僕から覚えていて欲しいことを言こます。覚えて

ください。まず、僕たちに必要なのは、ズバ抜けた運動能力・・・  
というよりも、気配を完璧に消せるかどうかです。そして、相手に  
情けをかけないこと。最後のは難しいですね。僕も、正直に言つて  
無理です。けれど、それを行動に見せないでください。絶対です。  
でなければ、私たちは生きられない。私たちに求められているのは、  
任務成功の四文字だけです。」

そう言つた。ああ、この人もいい人だと思う。きっと、言つのがつ  
らいのに、一生懸命俺にそれを伝えようとしている。

「はい。・・・」こは、いい人がいっぱいですね。多分、表より  
もきっと多い。考え方が浅いのは十分承知なのですが、そう思いま  
す。」

すると、狩下さんは少しひくりした顔をした。その後に、にこつ  
と笑つて、

「なら、君も優しいのでしょうか。・・・類は友を呼ぶと言つのです  
から。」

俺は、その言葉に戸惑つて、

「・・・そうだと、いいですね。」

と言つた。

「では、早速訓練に入ります。訓練は彼と一緒に行つてもらいま  
す。」

すると、奥から少年が現れる。つり上がりつきつい目に、オレンジ  
色の髪。多分中学生くらいだ。身長はまだ、少し小さい。

「彼は、鶴矢 李男君。人の気配を敏感に感じる体质の子なんです。  
彼に気づかれないよう、気配を消し、彼の背後に近づいてください。  
すばやくです。では、はじめましょう。」

「宜しく。」

「・・・。」

俺は鶴矢君に挨拶したが、鶴矢くんは無視をした。

嫌われてるのかな？ そう思つたが、まだ中学生。難しい年頃なん  
だろう。そう思い、大して気にしなかった。

「はい。始め」

狩下さんの命図がかかつた。

ーーの場所に残るため、頑張りつと思つた。

case 4 (後書き)

鶴狩道向辰新登場人物  
矢下信井野庄  
李満文龍美正樹  
男男男女男

です。

ありがとうございました！

1	1	1	1	1	1
5	6	8	7	5	7
9	0	2	6	7	0
c	c	c	c	c	c
m	m	m	m	m	m

1	2	1	2	1	1
4	8	8	7	6	7
歳	歳	歳	歳	歳	歳

・  
・  
・  
・  
以上

## case5 (前書き)

向井と狩下の年齢を変えました。よかつたら、前の話のあとがきを  
読んでください。

それと・・・更新遅れてしません。精進します。

では、どうぞ読んでください！

俺は今、気配を消す訓練中。状況は・・・、「やはり、一日では難しいですね。」と、この通り。

「はあ・・・はあ・・・すういですね、鶴矢君。」

「ええ、彼はすごいです。」

そう、俺は今、鶴矢君と気配を消す訓練をしているのだが、彼はとにかくすぐかかった。

訓練内容は、まず、鶴矢君が俺との距離が百メートルの地点に、目隠しをしている。俺は、とにかく鶴矢君に近づいてタッチする。だが、近づいている途中で鶴矢君が俺の気配に気づいたら、目隠しをしたまま、鶴矢君は俺から離れる。ただし、鶴矢君が離れていいのは俺が半径十メートル以内にいると分かつたときだけ。と、いう内容だ。

それを俺は、ことじとくかわされ、一回もタッチ出来ていない。初めは、もしかして鶴矢君は適当に動いているだけなんじゃないかって思っていたけれど、それが顔に出ていたのか、狩下さんが、「適当にかわしているというのはありませんよ？彼にメリットがありませんからね。」

と、言われた。

つまり、あまりいい結果は出せていないということだ。

そして、改めて思うこと。

「ほんとにすごいな・・・。鶴矢君。」

「ほそつと言った。すると、聞こえたのか狩下さんが、

「ええ、本当にすごいです。彼は。私も彼に気配を消して近づけと言われたら、そこそこ難しいですからね。」

それを、俺がやるにはどうしたらいいんだ？と、軽く途方に暮れた。

「まあ、でも、今日一日でやれという訳ではありませんので、と

りあえず、あと一時間頑張つて、また明日も頑張りましょ。」

「そうですね……。はい。頑張ります。」

そう、ここ以外ではもう生きていけない俺は、とにかく頑張るしかないんだ。

その後も、結果はあまり芳しくなく、今日の訓練は終わりを告げた。

俺は、トレーニングルームからそのまま食堂で食事を取り、風呂に入り、自分の部屋に戻ろうと、階段に向かった。

しかし、その途中の休憩所で鵜矢君を見つける。

「こんばんわ。鵜矢君。」

無視もどうかと思い、声をかける。しかし、声をかけたからには、何か話さなくてはならない訳で……。

何話そう……。と、悩んでいたときに鵜矢君が声をかけてくれた。

「あんたは、自分のこと可哀相だと思つてる?」

まだ、声変わりの終わつていない、不思議な声だ。

「……どうだろ。鵜矢君から見たらどう見える?」

と、質問をした。それに、鵜矢君は少し悩んで、

「……思つていない、と思つ。」

と、言った。

「ここに来る奴は皆そうなんだ。暗い顔をして入つてきて、俺は可哀相ですと皆にアピールする。悲劇のヒーロー面する。」

「ふん。つまり、鵜矢君はそういうヒーロー面した奴が気に食わないと?」

そういうと、鵜矢君はコクンと頭を下げる。多分、そうだという意味だらう。

「俺も、案外そつかもね。でも、鵜矢君が思つていないと言つてくれるんなら、思つていないと。」

「どういう意味?」

鵜矢君は怪訝な顔をして尋ねてくる。

「客観的に見て、そう思つたんなら、そうなんだろう。・・・俺は、いつだって第三者の目で物事を見つめるんだ。その物事に、家族や友達や仲間が関わっていても、それを変えるつもりは無い。」「あんた、なんだか人付き合いが悪そうだ。」

鶴矢君は、そう言つた。けれど、俺は笑つて、

「そんなことないよ。自分も第三者の目で見る為には、どうしても他人が居ないといけない。だから、人付き合いは悪くないほうだと思つてるけどね。」

「・・・ふうん。」

「だから、俺は両親が逮捕されたとき、確かにショックだったけど、今は冷静にね、考えてるよ。」

それは、本当のことだ。いつまでも落ち込んでいるようじゃ、前に進めない。

「・・・明日も早いんだろ。俺はもう寝る。」

そう言つて、いきなり鶴矢君は立ち上がつた。

「あ、最後にひとつ聞いていい?」

俺がそういふと、鶴矢君はピタッと立ち止まる。それが了承と考え、聞いてみたかったことを言つ。

「どうやつたら、気配を消せるの?」

すると、鶴矢君は少しだけこっちは振り返り、

「人間だと思わないこと。」

とだけ言つて、また歩き出してしまつた。

そして、俺は考える。

「人間だと、思わないこと?」「

どういう意味だらう・・・。」

その後しばらく考えて、なんとなくの意味が分かつた頃には、もう夜中だつた。

「・・・俺も寝るか。」

そう考えて、俺は、一階へ向かつた。

- \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* - \* -

「人間だと思わないこと。」

そう言われたのを、俺なりに考えた結果は、気配がある物だと思わないこと、だ。

それを、訓練中いつも頭に思い浮かべてやつていたら、ある日・・・

「すごいですね。一週間で彼に三メートルも近づけるなんて。」

「そ、俺は鵜矢君の半径三メートルまで近づけたのだ。」

「これなら、もう小さい任務なら出来るかも知れません。」

「本当ですか！」

あと、少しで任務がこなせる、といつとこひこまでいったのだ。

「でも、俺まだ鵜矢君にタッチできないんですけど・・・。」

「ああ、それなら大丈夫。彼は人より何倍も気配を感じることが出来るんです。その鵜矢君に三メートルも近づけたんなら、一般人は新庄君の気配は感じられないはずです。」

そう、狩下さんに言われた。

ともかくも、まあ鵜矢君にこれだけ近づけたのも鵜矢君のおかげな訳で・・・。だから、お礼をしようと、訓練中の鵜矢君に話しかけた。だが、

「ありがと。鵜矢君。」

「・・・別に。」

と、あつさりかわされてしまったが、まあよしとする。

と、そこで狩下さんに話しかけられた。

「へえ、あの鵜矢君が何か君に助言をしたんですか？」  
何故か、狩下さんは驚いた顔をしていた。

「ええ、『人間だと思わないこと。』と・・・。」

「へえ、良かつたですね。鶴矢君に気に入られる人なんて滅多に居ないんですよ。」

「へえ・・・と思つたが、まあ無口なところを見るとどうだらうなあつて思つた。」

「俺、気に入られたのか。」

それは、素直に嬉しいことだつた。

その後も、平均して大体三メートルくらいで気づかれてしまつた。そして、訓練が終わり、いつものようにそのまま食堂、風呂と行って、自分の部屋に戻るため、二階にあがつた。

すると、部屋の前で向井さんと辰野が待つていた。

「こんばんわ。正樹君聞いたよ、李男君に気配を悟られず二メートルも近づいたんだつて？」

何で知つてるんだ?と思つたが、あまり気にしない。

「さて、本題に移る。今から一ヶ月後に任務を開始する。トレーニングパートナーと、任務パートナーがそれぞれにいるんだが、大体どんなもんか分かるな?」

と、向井さんは聞いた。まあ、こんな分かりやすい名前なら分かるだろう。俺は「クつと頷いた。

――初任務はどんなだらうと、少し考える。

## case5 (後書き)

終わり方が微妙ですね。でも、これ以上続けると、ありえない長さになってしまひので、『ご承ください。

パートナーは次回発表です。

読んでくださいありがとうございます！

## お知らせ

「こんにちは。大分遅れてすいません。

実はこれ、なんの考えもなしに創った作品なんですよ。だから、これからもう一度構造を作り直して、一話目から投稿しなおしたいと思います。

うん・・・そんなにかかないと思うんですが・・・。

そうですね、土曜には投稿できればと思います。

こんな作品をこれからも宜しくお願いします。

それでは、少し練つてる構想のプロローグを流します。  
これは、もう一回投稿すると思います。

### 題名『母の名をかたる少女』

例えば、今日の朝まで普通だった。・・・としても、帰つてきたときは地獄だった。

そんなことを、朝少しでも考えただろうつか。

答えはNO。そんなことを考える人間がこの世のどこのにいるだろうか。そんなことを考えられるのは、予知の力がある、特定の人物だけだ。

私はもちろんそんな力は無かつた。当然だらう、一般家庭に生まれ育つたのだから。

「・・・お母さん？」  
いつも通りの時間に、いつも通りに帰つてきた家にはいつもとは違つ風景。

お母さんは血まみれで倒れていた。

その時、私が取るべき行動はなんだろう。普通は、冷静ならば救急車を呼ぶとか、警察を呼ぶとかだらうか。けれど、私はただ、呆然とその光景を見ていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5422w/>

---

裏組織の少年事情

2012年1月10日23時50分発行